



Title	シネヘン・ブリヤート語の2種類の未来表現 : 分詞の定動詞化に関する3類型
Author(s)	山越, 康裕
Citation	北方人文研究, 10, 79-96
Issue Date	2017-03-10
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/65819">http://hdl.handle.net/2115/65819</a>
Type	bulletin (article)
File Information	10_06_yamakoshi.pdf



[Instructions for use](#)

# シネヘン・ブリヤート語の2種類の未来表現 — 分詞の定動詞化に関する3類型 —

山越 康裕

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

## 1 はじめに

モンゴル諸語のひとつ、シネヘン・ブリヤート語<sup>1</sup>では、未実現の、未来に起こるであろう事象を表現する2種類の形式がある。その2種類は、ともに主節述語として未来分詞を用いるという点で共通しているが、その未来分詞に接続する人称マーカーが異なっている。人称接語のひとつは述語人称小詞(=PRED)、もうひとつは所有者人称小詞(=POSS)と呼ばれるものである。基本的には前者、述語人称小詞をともなう未来分詞(V-PTCP.FUT=PRED)が用いられる。その一方、後者の所有者人称小詞をともなう未来分詞(V-PTCP.FUT=POSS)は、話者の義務・推量といったモダリティをあらわす。本稿では、この両形式間にみられる「無標 vs. +モダリティ」という対立が、周辺言語に見られる「定動詞直説法 vs. 分詞」、換言すれば「動詞述語 vs. 名詞述語」に見られる機能的対立と並行的であること、この差異がV-PTCP.FUT=PREDが定動詞未来形のパラダイムの欠落を埋めることで「定動詞化」した後、所有者人称小詞の接続によって「再名詞化」して生じたと推測されること、を述べる。さらに、周辺諸言語を含めた分詞主節述語用法と関連形式との機能的対立の成立過程に関しては「分詞の動詞化による定動詞直説法の特殊化」「分詞の動詞化にともなう、名詞化標識による分詞の再名詞化」「分詞が名詞述語として機能する脱従属化」の三つの類型をたてることを提案する。

<sup>1</sup> 本稿で扱うブリヤート語のデータは、とくにことわりのないかぎり発表者が記述的研究に従事しているシネヘン・ブリヤート語(中国内蒙古自治区呼倫貝爾市; 話者数約6,000人)によるものを用いる。ただし本発表で扱う未来分詞、各人称接語の機能じたいはブリヤート語の威信方言であるホリ方言と変わらない(Jargal Badagarov氏 p.c.)。文法概略に関してはYamakoshi(2011)を参照されたい。シネヘン・ブリヤート語の音素目録は以下の通り: 母音音素: a [a~ɑ], o [o~o], ø, e [e~ɛ], u, ø, i / 子音音素: p\*, b, t, d, k\*, c\* [ts], f\* [ɸ], s, z, x, g, h, l, w, j, r, m, n, ŋ (\*は借用語にのみあらわれる音素)。h, w, j, ŋをのぞいた子音には対応する口蓋化子音が存在する。それらについてはjを子音字の右上に付して表記する(e.g. bj)。なお、シネヘン・ブリヤート語には語幹母音の音価に応じて接尾辞・接語の母音の音価が変わる、いわゆる母音調和の法則がある。本発表では母音調和の法則に基づく異形態を有する接尾辞・接語については、交替する母音の代表形を大文字(AもしくはO)であらわす。Aはa~ɔ~eに、AAはaa~ɔɔ~ee~øøに、Oはo~uにそれぞれ交替する。

## 2 シネヘン・ブリヤート語の文末（主節述語）における動詞の形式と述語形式

当該形式についてとりあげる前に、シネヘン・ブリヤート語の主節述語形式について概観する。

シネヘン・ブリヤート語は他のモンゴル諸語同様、典型的には SOV、Dependent-Head の語順をもつ膠着型言語であり、従属節は主節に先行する。つまり、主節述語は文末に位置するということになる。主節では現在時制にかぎり名詞類（名詞・形容詞など）が述語となることがあるが、それ以外の時制および従属節では原則、動詞が述語となる。名詞類語幹・動詞語幹に接尾辞を接続することで派生・屈折し、さらにその後には人称・主題・各種モダリティなどをあらわす接語（enclitic）が後接する<sup>2</sup>。接頭辞、前接語（proclitic）はない。形容詞名詞型言語であり、形容詞は名詞同様、語幹に直接、格接尾辞が接続し、名詞的に機能する。

動詞語幹は多様な接尾辞をとめない屈折する。屈折形式は三つに大別される。一つは文末専用の形式である定動詞（finite form）、二つ目は文中専用の形式であり、副詞的に述語動詞を修飾する副動詞（converb）、もう一つが名詞的・形容詞的機能を備え、文中・文末の両方で用いられる分詞<sup>3</sup>（participle; verbal noun）である。つまり、主節述語（＝文末）で用いられる動詞屈折形式は定動詞（直説法・希求法）および分詞ということになる。ただしとくに日常会話において文末で定動詞直説法が用いられる頻度は低く、定動詞希求法を用いた命令・願望をあらわす表現以外は、文末では分詞が用いられることが多い。表1に文末で用いられる屈折接尾辞を示す。

表1: 文末で用いられる動詞屈折接尾辞

定動詞希求法			
1 人称	-jAA ~ -ji, -hOO&, -OOz'A&		
2 人称	単数: -∅ 複数: -gtii 単複とも: -ii& 単数未来: -AArAi 複数未来: -AArAgtii		
3 人称	-Ag	願望	-hAi
定動詞直説法			
現在: -nA& 過去: -bA&			
分詞			
未来: -xA& 不完了: -AA& 完了: -hAn& 習慣: -dAg& 動作者: -AAs'A&			

「&」を付した形式は、通常文末で屈折形のあとに述語人称小詞（後述）を後続する。

文末では述語に人称マーカー（述語人称小詞 = PRED…表2）が後接する。

<sup>2</sup> これら接語は品詞分類上は「小詞」とする。

<sup>3</sup> 日本においては伝統的には「形動詞」と呼ばれる。これは副詞的性質をもつ副動詞に対し、形容詞的性質をもつことに由来する。一方、近年の欧米の研究者による記述では participle と訳される。「分詞」「形動詞」の呼称はそれぞれ問題を含むが、本稿ではひとまず、より一般的にその機能をイメージしやすい「分詞」を用いる。

表 2: ブリヤート語の述語人称小詞

人称\数	SG	(HON)	PL
1	=bi ~ =b <sup>j</sup>		=bd <sup>j</sup> A
2	=s <sup>j</sup> A ~ =s <sup>j</sup>	=tA ~ =t	
3			(=d) <sup>4</sup>

述語人称小詞は主語の人称・数に一致し、定動詞直説法・分詞・名詞類（名詞・形容詞ほか）の区別に関わらず後接する（1）<sup>5</sup>。言語によっては名詞述語に接続する人称標識と動詞述語に接続する人称標識とが異なるケースもあるが、ブリヤート語にはそのような区別はない。つまり述語人称小詞の接続可否が動詞/名詞を区別する基準とはならない。これは、述語人称小詞がもともとは文末に置かれた自立的な人称代名詞が文法化によって接語化したものであることに起因する<sup>6</sup>。つまり、動詞の屈折体系の外にある人称標示であるため、動詞・名詞の区別なく文末にあらわれるということになる。

- (1) a. *bii jab-na=b<sup>j</sup>*.  
 1SG.NOM 行く-IND.PRS=1SG.PRED  
 私が（今）行きます。[elicit.]
- b. *bii id<sup>j</sup>-ee=b<sup>j</sup>*.  
 1SG.NOM 食べる-PTCP.IPFV=1SG.PRED  
 私が食べた。[elicit.]
- c. *bii dɔndɔg=bi*.  
 1SG.NOM PSN=1SG.PRED  
 私がドンドクだ。[ns]

（1a）～（1c）に示した各形式のほか、定動詞希求法による述語形式がある。まとめると、文末での述語形式は基本的に（2a）～（2d）のいずれかとなる。

- (2) 文末（＝主節述語）における述語形式
- a. V-IND=PRED : e.g. (1a)
- b. V-OPT (=PRED)
- b-1. *oo-gtii*.  
 飲む-2PL.OPT  
 飲んでください。[ns]

<sup>4</sup> シネヘン・ブリヤート語では3人称複数述語人称小詞は必須要素ではなく、任意に接続する。

<sup>5</sup> 定動詞希求法については人称・数により屈折接尾辞が異なるため、原則として述語人称小詞を後接しない。ただし表1に示した通り、一部の希求法接尾辞については述語人称小詞を後接する。

<sup>6</sup> 中期モンゴル語テキストでは、接語化の前段階ともいえる人称代名詞の文末用法の例が頻出する。こうしたブリヤート語の人称標識の文法化についてはすでに Comrie (1980) が仮説をもとに検証している。

b-2. *oo-j-ii=s<sup>j</sup>*.

飲む-E-2OPT=2SG

飲みなさい。[ns]

c. V-PTCP=PRED : e.g. (1b)

d. N/Adj=PRED : e.g. (1c)

### 3 未来時制をあらわす文末形式

続いて、未来時制をあらわす文末形式について述べる。前節表1で見たとおり、未来時制をあらわす定動詞直説法はない (Badagarov 2015)<sup>7</sup>。そのため、未来の事象について述べる際には文末には未来分詞形 (V-PTCP.FUT) が用いられ、述語人称小詞が接続する (3)。つまり、定動詞未来形のパラダイムの欠落を未来分詞が埋めているといえる。

- (3) *bii ugløø erte ... (中略) ... dɔŋgɔd-xɔ=b<sup>j</sup>*.  
 1SG.NOM 翌日 朝 ..... さえずる-PTCP.FUT=1SG  
 俺は明朝... (中略) ... さえずる。[山越 2016: 119]

(3)の形式は(2c)に該当する形式だが、未来時制に関しては、(2)で見た四つの形式のほかに、未来分詞が所有者人称小詞<sup>8</sup>(表3参照)をともなう形式が用いられることがある(4)。このとき所有者人称小詞は、主語の人称・数に一致する。

表3: ブリヤート語の所有者人称小詞

人称\数	SG	(HON)	PL
1	=m (ni)		=mnAi
2	=s <sup>j</sup> (ni)	=tni	=tnAi
3	=ni ~ =n <sup>j</sup>		

- (4) *bii ɔdɔɔ jab-xa=mni. bii zaabaha sag-t-aa*  
 1SG.NOM 今 行く-PTCP.FUT=1SG.POSS 1SG.NOM 必ず 時-DAT-REFL  
*xur-xe=mni.*  
 到る-PTCP.FUT=1SG.POSS  
 私はもう行きます。時間までに着かないと。[山越 2006: 146]

未来分詞に述語人称小詞が接続した形式 (V-PTCP.FUT=PRED) = (3) と、未来分詞に所有者人称小詞が接続した形式 (V-PTCP.FUT=POSS) = (4) はどちらも「発話時点でまだ

<sup>7</sup> Skribnik (2003)、Yamakoshi (2011) では *-OOz<sup>j</sup>A* を定動詞未来接尾辞としている。一方 Badagarov (2015) は *-OOz<sup>j</sup>A* を定動詞希求法接尾辞としている。*-OOz<sup>j</sup>A* をどう扱うべきかは今後検討する余地があるが、否定形が他の定動詞希求法同様、否定副詞 *buu* を前置することを根拠に、本稿では Badagarov (2015) の見解をとる。

<sup>8</sup> 所有物に接続し、所有者の人称・数を標示するほか、従属節末尾の動詞 (分詞および一部の副動詞) に接続し、節内の主語の人称・数を標示する。

起こっていない事象」をあらわす。とくに V-xA=POSS は義務・推量といったモダリティ (deontic/epistemic modality) 的意味合いが付与される。文脈によって異なることもあるが、傾向としては1人称が主語の場合は義務、2人称が主語の場合は義務・推量、3人称が主語の場合は推量をあらわす (5)。

- (5) a. *sai-g-aa oo-xa=mmai=go.*  
茶-E-REFL 飲む-PTCP.FUT=1PL.POSS=Q  
一緒にお茶を飲みませんか。[山越 2011: 75]
- b. *dɔrɔɔ jab-xa=sʲ.*  
すぐ 行く-PTCP.FUT=2SG.POSS  
すぐ行くべきだ。[elicit.]
- c. *xaloon bɔl-xɔ=n.*  
暑い なる-PTCP.FUT=3.POSS  
(今日は) 暑くなるぞ。[ns]
- d. *ux-xe=m.*  
死ぬ-PTCP.FUT=1SG.POSS  
(ひどい火傷を負い、死が避けられない状況であることを自覚した状態で) 俺はもう死ぬ。[山越 2016: 126]

一方、述語人称小詞をともなう未来分詞は義務・推量といったモダリティに関与しない (6a)<sup>9</sup>。(6a)、(6b) はともに漢語 (中国語) 調査例文を話者に訳出してもらうことで得られた例文である。(6a) の漢語例文にはモダリティに関わる要素が含まれていないが、(6b) には義務モダリティをあらわす「必須 bi4xu2」(～しなければならない) が含まれている。この義務モダリティを含む例文を、話者は所有者人称小詞をともなった未来分詞で表現している。すでに提示した (4) も同様に、「该 gai1」(～すべきである)、「必須」に所有者人称小詞をともなった未来分詞が対応している。

- (6) a. *uglɔθ-g-øər idʲeel-eed azʲalla-xa ɔsʲ-xɔ=bʲ.*  
翌朝-E-INS 食事する-CVB.PFV 働く-PTCP.FUT 着く-PTCP.FUT=1SG.PRED  
朝食の後、仕事に行きます。[山越 2006: 166]
- b. *bii munøθ jab-xa=m. tendɛ xun*  
1SG.NOM 今 行く-PTCP.FUT=1SG.POSS そこに 人.NOM  
*xuʲee-zʲai-na.*  
待つ-PROG-IND.PRS  
私はもう行かなくてはいけません。人が待っているんです。[山越 2006: 170]

<sup>9</sup> 定動詞希求法に future imperative (V-AArAi) と imperative (V-θ) の系列があることを根拠に、Badagarov (2015) は上記2形式の差異を distal future (V-PTCP.FUT=PRED) と proximal future (V-PTCP.FUT=POSS) だと主張している。しかし、漢語 (中国語) の調査例文を用いた elicitation による例文 (3) (5a, b) を見ると、V-xA=POSS は常に「该 (～すべきである)」「必須 (～しなければならない)」などの語句に対応している。これは単なる distal / proximal の違いでは説明できない。

このように、所有者人称小詞をともなう未来分詞は、述語人称小詞をともなう未来分詞、つまりより一般的な形式とは異なる、話者の義務・推量モダリティをあらわす形式だといえる。

#### 4 周辺諸言語等における定動詞直説法 vs. 分詞による文末形式の機能的差異との対照

続いて、周辺諸言語における主節述語形式の対立について概観する。同じく SOV 語順で従属節が主節に先行する周辺のアルタイ諸言語等を見ると、文末に定動詞と分詞がともに用いられることが多く、そのときの両者の差異が証拠性やモダリティに拠っていることが先行研究で言及されている。たとえばツングース諸語のナーナイ語やウデヘ語では、もっぱら分詞が文末で用いられ、定動詞は「自分が実際に体験した事柄」(風間 2011: 20) の場合<sup>10</sup>のみ用いられることが風間 (2011) によって指摘されている。つまり、分詞がより標準的な形式であり、定動詞が周縁的で、確言的なモダリティをあらわす形式だといえる。

一方、同じくツングース諸語のエウエン語東方言にも文末において定動詞と分詞との間に機能的対立があるが、その対立の様相はナーナイ語やウデヘ語とは異なる。エウエン語東方言について Malchukov (2013: 182) は、文末に非未来分詞が用いられて過去時制をあらわすこと (=7a)、これが本来は分詞に後続するコピュラが省略された形式 (=7b) であることを指摘している。

##### (7) *E.Evn.*

a. *bej-il hör-ri-ten.*

man-PL go-PST-3PL(POSS)

The men left. [Malchukov 2013: 182]

b. [*bej-il hör-ri-ten*] *bi-d'i-n.*

man-PL go-PTCP.NFUT-3PL(POSS) be-FUT-3SG

The men probably left. (Lit. the men's leaving will be.) [Malchukov 2013: 182]

この (7a) のような非未来分詞の用法について風間 (2012: 144) は、文末で用いられるのはきわめてまれで、この非未来分詞の文末用法は名詞述語文としての性格を強く残すと指摘している。つまり、こちらは同じ定動詞 vs. 分詞の対立であるが、定動詞がより標準的な文末形式であり、分詞が周縁的な形式であるといえる。同様に分詞が周縁的な形式となっている言語としては、エストニア語、サハ語などがある。エストニア語では分詞が文法化によって間接証拠をあらわす主節述語として用いられるようになったことを Campbell (1991) が (8)、サハ語では文末に位置する分詞中立時制が認識モダリティ (epistemic modality) に関与することを江畑 (2013) がそれぞれ指摘している (9)。

##### (8) *Est. naaber ost-vat kolm hobust.*

neighbor.NOM buy-PRS.INDIR three horses

**They say the neighbor is buying three horses.** [Campbell 1991: 288]

<sup>10</sup> Malchukov はこれを affirmative mood (e.g. Malchukov 2013: 188) と説明している。風間 (2012) のいう「直接体験」が evidentiality よりも epistemic modality によるものである可能性もある。今回とりあげた言語で evidentiality と関連付けられている事象がいずれも epistemicity に関連する可能性もあるが、それについての議論は措く。

(9) *Skh. umax umu-r kem kel-leb-e.*

雌牛 搾乳する-PTCP.PRS 時 来る-PTCP.NEUT-3SG.POSS

牛の乳搾りをする時期が来たようだ。[江畑 2013: 17]

このように、定動詞 vs. 分詞という対立がみられる言語があってもその対立は均質ではなく、定動詞がモダリティや証拠性に関して有標となるケース、分詞が有標となるケースがあるようである。

さらに、モンゴル諸語においても定動詞と分詞の文末用法で対立をみせる言語がある<sup>11</sup>。たとえば、13世紀の中期モンゴル語で記されたとされる『元朝秘史』の分詞文末用法を分析した Yamakoshi (2016) は、ブリヤート語の未来分詞に対応する非過去分詞 *-QU* が典型的な分詞の中では唯一文末用法をもつこと、また文末で用いられる例はいずれも会話文であり、大半が修辭疑問文 (10)・否定文・条件文といった文で用いられ、話者の義務・推量モダリティ (deontic/epistemic modality) をあらわすことを指摘した。

(10) *Mid.M.**edö'e qarangkui söni ker ol-qun bida.*

今 暗い 夜 いか に 得る-PTCP.NPST 1PL.NOM

今、暗き夜に、どうして見つけ出すべきか我等<sup>12</sup> [巻 2, 83 節]

モンゴル諸語のひとつ、17世紀の近代オイラト語でも同様に疑問文・否定文・条件文にのみ未来分詞があらわれることがサンボドルジ (2014) によって指摘されているほか、現代オイラト語のテキスト資料である Choijungjab et al. (eds.) (1987) を見ても、近代オイラト語と同様の用法が確認される。つまり、中期モンゴル語や近代・現代オイラト語では定動詞が無標の形式であり、分詞がモダリティにおいて有標の形式として対立しているといえる。

その反面、(1) で見たように文末で定動詞直説法も分詞も用いられうるブリヤート語では出現頻度に差こそあれ、定動詞 vs 分詞に上記の諸言語のような明確な機能的差異が見られない (cf. 山越 2013: 29)。しかし他方で、3節で見た述語人称小詞をともなう未来分詞と所有者人称小詞をともなう未来分詞の間に見られる両者の機能的差異は、これらの言語における定動詞 vs. 分詞の機能的差異と並行しているようにみえる (表 4)。ただし、本節で見たとおり定動詞 vs. 分詞において、どちらの形式がモダリティ・証拠性において有標となるか、は言語によって異なる。本節で見た諸言語の定動詞直説法と分詞の差異、シネヘン・ブリヤート語の未来分詞の差異を表 4 にまとめて示す。

<sup>11</sup> 現代モンゴル語では方言間で分詞の文末用法に差異が見られる。おおづかみにいえば、北方のモンゴル語諸方言では分詞の定動詞化が進んでおり、南方のモンゴル語諸方言では分詞は限定的に文末で用いられるとまとめられる。

<sup>12</sup> 日本語訳は小澤訳 (1997: 66) による。



表4: 周辺諸言語における分詞 vs. 定動詞とシネヘン・ブリヤート語の未来分詞との対比

	<i>Udh.</i> <i>Nan</i>	<i>E.Evn.</i>	<i>Est.</i>	<i>Skh.</i> <i>Mid.M.</i> <i>Oir.</i>		<i>Bur.</i>
分詞		低頻度	[+INDIR]	[+MOD]	V-PTCP.FUT=POSS	[+MOD]
定動詞	[+DIR]				V-PTCP.FUT=PRED	

空欄はモダリティ・証拠性に関して「無標」であることを示す。

## 5 Malchukov (2013) による類型化「動詞化」「脱従属化」と動詞述語 vs. 名詞述語

前節で見たような、シベリアの諸言語において広範に確認される「分詞の主節述語用法」に関して、Malchukov (2013) は名詞的要素 (= 分詞) の動詞化という観点から (11) のような階層的なパラメータを設定し、そのうえで脱従属化 (insubordination) と動詞化 (verbalization) という分詞の二つの文法化の道筋を提案している。

### (11) Malchukov (2013) による分詞の動詞化に関するパラメータ

- a. the use of special forms of finite agreement distinct from the possessive suffixes on the verb
- b. monofunctionality: exclusive use as a finite predicate
- c. the possibility of taking agreement suffixes vs. copula support
- d. the availability of periphrastic verbal negation
- e. modification through an adverb
- f. combination with an accusative object

脱従属化は (屈折的に) 名詞化された形式としての分詞が、再び (11) のような動詞性を獲得していく過程にある段階、つまり文末でも分詞としての名詞的な性質を保持しているような状態にあるものを指す。たとえば前節でとりあげたエウエン語東方言の非未来分詞の文末用法は、後続するコピュラ動詞の省略とみなすことが可能であるという。エストニア語分詞の文末用法について Campbell (1991) は通時的観点に立ち、(12a) (=8 再掲) のような分詞の主節述語用法が、(12b) のような構文から補文標識・発話行為動詞の省略がおこった結果、形成されたとしている。

### (12) *Est.*

- a. *naaber ost-vat kolm hobust.* = (8)  
neighbor.NOM buy-PRS.INDIR three horses

**They say** the neighbor is buying three horses. [Campbell 1991: 288]

- b. *naaber ütle-b ost-vat kolm hobust*  
neighbor.NOM says buy-PRS.INDIR three horses

The neighbor says he is buying three horses. [Campbell 1991: 288]

こうした、通時的・共時的な観点から、主節述語として機能する分詞が、本来は別の述語動詞とともに用いられていた／いることが確認できるような状態にあるのが脱従属化といえ

る。いわゆる脱従属化 (insubordination) (Evans 2007) よりも広義でこの術語を用いることに Malchukov (2013) はふれたうえで、本来単独では主節述語とならない分詞が主節述語として用いられる現象を、このように説明している。

もう一方の動詞化は、分詞が定動詞化した状態にあることを指す。(11) の6つのパラメータをより多く満たすほど分詞が(定)動詞性を獲得し、文を終止するはたらきを有する、つまり文末では定動詞として用いられる。Malchukov (2013) はアルタイ諸言語の多くについては「高度に定動詞化している」とみなし、動詞化の典型例とみなしている。

なお、Malchukov (2013) の類型は動詞述語 vs. 名詞述語という対立を前提としている。さらに、その対立には本稿4節で観察したようにモダリティや証拠性が関連することも以下のように先行研究で指摘されている。

「ウラル・アルタイ語族のユーラシアのエピデンシャル形式はほとんど、分詞の形か名詞化された形に基づいています (sic.)」(マルチュコフ 2014: 85)<sup>13</sup>

「形・名・動詞形<sup>14</sup>で文を終えるということは動詞述語文を名詞述語文の枠に投入して表現するものと捉えることができる。(中略)名詞述語文 A is B. は既知で特定の A について、それが恒常的に B であるという話し手の知識や判断を示すのが普通であろう。(中略) [筆者補足: 名詞述語文は] 動詞述語文(定動詞)とは実相 (evidentiality) の点で異なる」(風間 2012: 159)

これに加えて長崎 (2013: 4) は、風間 (2012) の指摘する上記「実相の違い」は認識モダリティと関連している可能性を示唆している。また、日本語についても名詞述語文とモダリティの関連性について指摘がなされている。たとえば井島 (2010: 57) は「ノダ、ワケダ、コトダ、モノダなどの形式名詞述語文は、話し手自身が判断主体であるという点でモダリティ表現と非常に近いものである」と述べている。

以上を総合すると、次の(13)のようにまとめることができる。

- (13) a. 周辺諸言語に見られる文末の定動詞直説法と分詞のモダリティに関する差異は、分詞の(定)動詞化という文法化の過程で生じたものとらえられる  
b. この機能的差異は、動詞述語 vs. 名詞述語の対立に見られる  
c. つまり、定動詞直説法と分詞との機能的差異は、動詞述語文と名詞述語文との間の機能的差異と換言できる

4節で中期モンゴル語やオイラト語における定動詞直説法と分詞の機能的差異についてふれたとおり、モンゴル諸語についても(13)は適用可能と考えられる。ただし、モンゴル諸語では(11)で示した分詞の動詞化に関するパラメータを適用しにくいという問題がある。たとえばモンゴル語は主語と述語との間に一致がない。またブリヤート語は主語と述語との間の一致があるが、すでに2節(1)で例示したように述語人称小詞は動詞の屈折体系の外にある要素であり、定動詞直説法と同じく名詞述語も述語人称小詞を接続し、主語人称を標示する。そのため、モンゴル語もブリヤート語も(11a)のパラメータによって動詞化の度合い

<sup>13</sup> 「ユーラシアに分布するウラル語族・アルタイ諸言語の証拠性に関わる形式はほとんどが分詞か動詞が名詞化された形式に基づいている」という意味合いだと推測される。

<sup>14</sup> 本稿における「分詞」に該当する形式をさす。

を計ることができない。なお、(11c) のパラメータも同様に一致を示すマーカに関するパラメータであるが、こちらはコピュラの消失という点で有効なパラメータといえる。中期モンゴル語では非過去分詞が疑問・否定・条件文の文末でのみ用いられる (Yamakoshi 2016) が、そのほかの文では (14) のように分詞はコピュラ動詞をともなって文末で用いられる。

(14) *Mid.M.*

qači\_külüg-ün kö'ün qaidu nomolun eke-deče töre-ksen bü-le'e.  
 PSN-GEN 子 PSN PSN 母-LOC+ABL 生まれる-PTCP.PFV COP-PST  
 カチ・クルグの子カイドゥはナモルンという母から生まれたのだった。<sup>15</sup> [巻1, 46節]

本来、分詞が文末で用いられる際にはコピュラ動詞をともなっていたものが、定動詞化によって copula support を失ったととらえると、やはりモンゴル諸語においても分詞の文末用法は分詞の定動詞化という文法化の過程で生じたものと推測される。中期モンゴル語がシネヘン・ブリヤート語を含むブリヤート語の前段階の言語状態を指しているかどうかについては慎重な議論が必要であるが、おそらく (14) のようにコピュラ動詞をともなっていた状態からコピュラを消失して形成されたと推測される。つまり、定動詞化が進んだ結果、分詞が文末で用いられるようになったといえる。以上から、述語人称小詞をともなう未来分詞 (V-PTCP.FUT=PRED) は、定動詞直説法のパラダイムにおいて欠落していた未来時制を埋めるかたちで定動詞化し、動詞述語として機能しているとみなすことができる。

次節では、シネヘン・ブリヤート語の所有者人称小詞をともなう未来分詞がどのように形成されたのか、その過程について推測する。

## 6 所有者人称小詞をともなう未来分詞 (V-PTCP.FUT=POSS) の形成過程

前節のとおり、述語人称小詞をともなう未来分詞 (V-PTCP.FUT=PRED) は動詞述語として機能しているといえる。一方、所有者人称小詞をともなう未来分詞 (V-PTCP.FUT=POSS) のような文末形式は中期モンゴル語では確認されない。可能性としては a. 従属節からの脱従属化によって文末で用いられるようになったか (=§6.1)、b. 定動詞化した分詞を再名詞化するための標識として所有者人称小詞 =POSS が用いられるようになったか (=§6.2) のいずれかが考えられる。本節ではこの二つの可能性について検討する。

### 6.1 脱従属化の可能性

所有者人称小詞 (=POSS) は (分詞以外の要素に後続する場合も含め) 基本的には文中で用いられる。さらに注 8 で述べているように、従属節中の主語をあらわす機能を有する。こうした機能を考えると、文末の V-PTCP.FUT=POSS は脱従属 (insubordination) とも考えられる。Malchukov (2013) は脱従属の一つのタイプとしてエウエン語をあげ、エウエン語の文末 [分詞-POSS] の形式を [分詞-POSS COP-PRED] のコピュラが省略された形式としている。しかしブリヤート語では同様のコピュラをともなった [V-xA=POSS COP] という形式がない<sup>16</sup>。可能性としては a) 「副詞節」からの脱従属 (15)、b) 「名詞節」からの脱従属 (16) の二つのケースが考えられる。しかしながら、(15) (16) に節内の主語を補った (15)' (16)' では

<sup>15</sup> 日本語訳は小澤 (1997: 29) による。

<sup>16</sup> 一方、『元朝秘史』モンゴル語の未来分詞の限定的な用法はコピュラつきの構造も並行して存在するため、エウエン語的な「脱従属化」といって差し支えないと考える。

主語に属格が用いられている。結論を先に言えば、単に脱従属であるとは断定できない。

#### a) 「副詞節」からの脱従属化の可能性

副詞節からの脱従属化である可能性については、Skribnik (2003: 118) および山越 (2011: 75–76) がそれぞれ示唆している。ブリヤート語では (15) のように所有者人称小詞をともなった分詞が副詞節を形成する例 (山越 2013: 35–36) があり、この形式からの脱従属化である可能性がまず考えられる。

ただし、ここからの脱従属化とみなすには一つ問題が残る。この副詞節述語として機能している、所有者人称小詞をともなう分詞 (V-PTCP=POSS) は、従属節主語が主節主語と異なることが前提となる。このとき、従属節主語を明示すると主語は属格をとる (15)′。単純にこの副詞節からの脱従属と考えた場合、所有者人称小詞をともなった未来分詞が文末であらわれる場合も、主語が属格をとることが予測されるが、すでに (4) (6) で見たように、未来分詞の文末用法では主語は主格であらわれる。このため、脱従属化の結果であるとは断定できない。

- (15)  $\theta\theta d-\theta\theta$      $xar-xa=s^j$                        $am-aar$   $hunch-ii=s^j$   
 上を-REFL 見る-PTCP.FUT=2SG.POSS □-INS 魂-ACC=2SG.POSS  
*ab-x-aa*                      *bai-na.*  
 取る-PTCP.FUT-REFL いる-IND.PRS  
 お前が上を見たら (化け物は) くちばしでお前の魂を奪おうとする。[山越 2016: 123]

- (15)′  $s^j inii$      $\theta\theta d-\theta\theta$      $xar-xa=s^j$                        $am-aar$   $hunch-ii=s^j$   
 2SG.GEN 上を-REFL 見る-PTCP.FUT=2SG.POSS □-INS 魂-ACC=2SG.POSS  
*ab-x-aa*                      *bai-na.*  
 取る-PTCP.FUT-REFL いる-IND.PRS  
 お前が上を見たらくちばしでお前の魂を奪おうとする。[(15) からの作例]

#### b) 「名詞節」からの脱従属化の可能性

続いて、名詞節からの脱従属化の可能性について考える。分詞は名詞節述語用法をもち、直接格接尾辞を接続することで格変化する。主格は無標のため、主節主語として名詞節が用いられる場合には所有者人称小詞が直接、後接することがある (16)。

- (16) *tere gotal*                       $umde-hen=in$                        $\odot\odot\odot$   $os^j ir-gui$     *xordan*  
 その ブーツ.INDF 着る-PTCP.PFV=3.POSS 今 理由-NEG 速い  
*bol-no.*  
 なる-IND.PRS  
 そのブーツを履いたのはものすごく速くなる。[山越 2016: 114]

ただしこちらも副詞節の場合と同様、節内の主語を明示した場合には属格であらわれる (16)′。そのためやはり名詞節からの脱従属化であるとも断定できない。

- (16) *xen negen-ei tere gotal umde-hen=in odoo os<sup>j</sup>ir-gui*  
 誰 一-GEN その ブーツ.INDF 着る-PTCP.PFV=3.POSS 今 理由-NEG  
*xordan bol-no.*  
 速い なる-IND.PRS  
 誰かそのブーツを履いたのはものすごく速くなる。[(16)からの作例]

なお、すでに山越(2011)で指摘している通り、所有者人称小詞は述語人称小詞とは他の小詞との承接順序が異なる。所有者人称小詞は諾否疑問文に用いられる疑問をあらわす接語、疑問小詞よりも前に位置するが(17a)、述語人称小詞は疑問小詞よりも後に位置する(17b)。つまり述語人称小詞は文を完結させるのに対し、所有者人称小詞はその機能を有していないということになる。名詞節か副詞節かといった問題は残るが、この点で脱従属化による構文である可能性を残す。この点に関しては文の「完結性」がどのように認められるか、という問題につながるものであり、今後引き続き検討する必要がある。

- (17) a. *sai-g-aa oo-xa=mnai=go.* = (5a)  
 茶-E-REFL 飲む-PTCP.FUT=1PL.POSS=Q  
 一緒にお茶を飲みませんか。[山越 2011: 75]  
 b. *sai-g-aa ooxa=g=ta.*  
 茶-E-REFL 飲む-PTCP.FUT=Q=2PL  
 お茶を飲みますか。[elicit.]

## 6.2 名詞化標識としての所有者人称小詞

続いて、所有者人称小詞が名詞化標識として機能している可能性について検討する。シネヘン・ブリヤート語は他のモンゴル諸語同様、形容詞名詞型の言語であり、形容詞語幹や数詞語幹は文中で名詞同様、格接尾辞を接続して名詞的に機能しうる。分詞も形容詞・数詞同様、名詞的に機能する。ただし、形容詞(18)や数詞(19)、分詞(16)(=上掲)が格接辞をとまわずに名詞として文中で機能する際には所有者人称小詞ほか、何らかの標識が後続する。

- (18) a. *ene juumen-uud-ei zarim=in minii, zarim=in minii*  
 この もの-PL-GEN 一部の=3.POSS 1SG.GEN 一部の=3.POSS 1SG.GEN  
*axai-n.*  
 兄-GEN  
 この中のいくつかは私ので、いくつかは私の兄のです。[山越 2006: 142]  
 b. *\*ene juumen-uud-ei zarim minii, zarim minii axai-n.*  
 この もの-PL-GEN 一部の 1SG.GEN 一部の 1SG.GEN 兄-GEN  
 [(12a)からの作例]
- (19) *negen=in malgai negen=in gotal umd-eed..*  
 一=3.POSS 帽子.INDF 一=3.POSS ブーツ.INDF 着る-CVB.PFV  
 (そのうちの)一匹は帽子を、一匹はブーツを身につけて... [山越 2016: 114]

名詞もこうした標識を後続しうが、形容詞や数詞がこうした標識なしでは名詞として機能しえない (= 18b) のに対し、名詞は (20a) のように標識が後続しなくても非文とはならない点が異なる。つまりもともと名詞的な性質を備えている形容詞や分詞が、統語上名詞句主要部として機能するためには所有者人称小詞ほか、何らかの標識が後続する必要がある。言い換えれば、形容詞や分詞が名詞化していることを明示する機能を、これらの標識が副次的に有しているといえる<sup>17</sup>。

- (20) a. *id<sup>l</sup>-xe*                    *juumen* *tɔxɔn* *sɔɔ*,        *xeregle-xe*                    *juumen*  
 食べる-PTCP.FUT    もの        棚            の中に    用いる-PTCP.FUT    もの  
*s<sup>l</sup>ereen* *deere*.  
 机            上に  
 食べる物は棚の中に、使うものは机の上にあります。[山越 2006: 143]
- b. *id<sup>l</sup>-xe*                    *juumen=in* *tɔxɔn* *sɔɔ*,        *xeregle-xe*  
 食べる-PTCP.FUT    もの=3.POSS    棚            の中に    用いる-PTCP.FUT  
*juumen=in* *s<sup>l</sup>ereen* *deere*.  
 もの=3.POSS    机            上に  
 食べる物は棚の中に、使うものは机の上にあります。[(20a) からの作例]

このように、文中では形容詞が分詞が名詞化していることを明示するために所有者人称小詞が後接しているといえる。このことから、文末の未来分詞に接続する所有者人称小詞も、同様に名詞述語文であることを明示する機能を担っていることが推測される。似たような状況で、形容詞に所有者人称小詞が後続している例が (21) である。ここでは形容詞 *ixen* 「大きい」に所有者人称小詞が後接することで、「年長者」という意味をあらわしている。

- (21) *minii*        *abz<sup>l</sup>aa*        *xamg-ai*        *ixen=in*.  
 1SG.GEN    姉.NOM    全て-GEN    大きい=3POSS  
 私の姉が一番年上です。[山越 2006: 147]

## 7 分詞と関連形式との対立に見る文法化の類型

前節 6.2 で見たように、所有者人称小詞が名詞化標識としての役割を果たしているとする、述語人称小詞をともなった未来分詞 V-PTCP.FUT=PRED と所有者人称小詞をともなった未来分詞 V-PTCP.FUT=POSS は、動詞述語 vs. 名詞述語 [+MOD] の対立で説明可能、つまり周辺言語の定動詞 vs. 分詞 [+MOD] の対立と並行的であるといえる。ここで周辺諸言語と異なるのは、その対立の形式と、どちらの形式がより有標か、という点である。「分詞の機能が拡張し、定動詞化する」という点ではナーナイ語やウデヘ語などの分詞の遂げた変化と同じだといえる。ただしナーナイ語やウデヘ語は分詞の動詞化によって本来の定動詞がより確言的な方向へ有標化 (動詞述語 [+DIR] vs. 名詞述語) したのに対し、ブリヤート語は定動詞未来時制を欠いていたため、[+MOD] 形式として名詞述語文相当の形式が求められ、結果とし

<sup>17</sup> ここで副次的としたのは、本来的には所有者人称小詞は一致の標識であるためである。もちろん所有者を標示することから、所有者人称小詞は定性・情報構造 (cf. 山越 2011) といった面でも接続元のホストに影響を与える。つまり、名詞化が第一の機能とはいえない。

て所有者人称小詞の付加による再名詞化がおこった。このように、本来あった形式（定動詞）が有標形となったか、新たな形式が有標形として導入されたか、という点で両者は異なる。

なお、Malchukov (2013) の文法化の二つの類型 (insubordination / verbalization) は分詞の動詞化に焦点をあてたものだが、文末動詞に関連する形式との機能的対立に焦点をあてると、以下三つの類型に分けるのがより妥当と考える (22)。

- (22) a. 動詞化 (verbalization) : 分詞の動詞化 & 定動詞の「確言」への有標化  
 ⇒ 分詞 vs. 定動詞 ([+MOD/+DIR])
- b. 再名詞化 (re-nominalization) : 分詞の動詞化 (& 定動詞欠落) & 分詞の再名詞化  
 ⇒ 分詞 vs. 分詞 + 名詞化標識 ([+MOD/+INDIR])
- c. 脱従属化 (insubordination) : 分詞の有標化 (脱従属化)  
 ⇒ 定動詞 vs. 分詞 ([+MOD/+INDIR])

それぞれの類型における対立を表にし、該当する言語をそれぞれ示すと次の表5のようになる。表5で「無標」としたのは、モダリティ・証拠性などにおいて明示的な意味を示さないことを指す。たとえばシネヘン・ブリヤート語の述語人称小詞をとまなう未来分詞 (V-PTCP.FUT=PRED) は未来・未実現の事象について言及する形式であるため、当然そこに話者の価値判断が含まれる。しかしながら、もう一方の所有者人称小詞をとまなう未来分詞 (V-PTCP.FUT=POSS) が明確に義務・推量モダリティをあらわすのに対し、述語人称小詞をとまなう未来分詞はモダリティに関して明示的ではない。こうした形式を「無標」として示している。

表5: 分詞 vs. 他形式の対立に焦点をあてた類型化

	(22a) 動詞化	(22b) 再名詞化	(22c) 脱従属化
分詞 +NMLZ	—	[+MOD/+INDIR]	—
分詞	無標	無標	[+MOD/+INDIR]
定動詞	[+MOD/+DIR]	—	無標
	<i>Udh., Nan.</i>	<i>Bur., Jap?</i>	<i>E.Evn., Est., Skh., Mid.M., Oir.</i>

(22) のような3類型をたてると、ブリヤート語の未来分詞のふるまいを (22b) の再名詞化の類型にあてはめることができる。また、「定動詞 vs 分詞が実相に参与する」という風間 (2012) (やマルチュコフ 2014) の指摘を、分詞の動詞化の度合いと定動詞の有無によってより広く適用可能となる。つまり、定動詞直説法を欠く場合には分詞を再名詞化することでモダリティや証拠性に参与する、という条件を付け加えることが可能となる。なお、再名詞化は所有者人称小詞に限定されない。たとえば分詞に文末小詞 =*jum* を後続する形式 (=23) があるが、これも「もの」をあらわす名詞 *juumen* (=19) の文法化によって通時的に形成されたと推測されることから、再名詞化の一方法といえる<sup>18</sup>。さらに、(23) の [分詞=*jum*] と

<sup>18</sup> これについては今後検証が必要だが、文末小詞 *jum* の用法は『元朝秘史』モンゴル語には確認されず (cf. 栗林・确精扎布 2011 にて確認)、時代が下り、分詞の文末用法が用いられるようになった近代モンゴル語 (cf. 18世紀の口語資料『初学指南』(栗林・斯欽巴図 2015) など確認) では使用例がある。

機能・文法化の過程が似通っている日本語の「ノダ」や形式名詞（等を起源とする助動詞類）の文末用法の発達<sup>19</sup>も、同様に（22b）の類型と考えることができる。

- (23) *sax<sup>j</sup>-ɔɔd*      *al-xa=jum*      *g-ee*      *ge-ne.*  
 叩く-CVB.PFV 殺す-PTCP.FUT=MOD という-PTCP.IPFV という-IND.PRS  
 「叩き殺すんだ」と言ったそう。[山越 2014: 187]

## 8 結論

以上、本稿ではブリヤート語の主節述語として用いられる未来分詞に後続する2種類の人称小詞の機能的差異を確認したうえで、1) 述語人稱小詞をともなった未来分詞（V-PTCP.FUT=PRED）と所有者人稱小詞をともなった未来分詞（V-PTCP.FUT=POSS）の間の機能的差異は、周辺諸言語における定動詞と分詞、言い換えれば動詞述語と名詞述語との間の機能的差異と並行的であること、2) これはブリヤート語未来分詞の定動詞化が進んだ結果、新たに名詞述語相当の形式として V-PTCP.FUT=POSS が用いられるようになったと推測されることを述べた。そのうえで、3) 定動詞 vs 分詞の機能的対立に関しては、a. 分詞の定動詞化にともない定動詞がより「確言」的モダリティをあらわすように特殊化した「動詞化」、b. 分詞の定動詞化にともない、名詞化マーカーをともなった分詞が認識・義務などのモダリティをあらわすようになった「再名詞化」、c. 通常は定動詞が用いられ、特殊なモダリティをあらわす際に（本来は主節述語として用いられない）分詞が用いられる「（分詞の）脱従属化」という三つの類型が、日本語を含む周辺諸言語に適用できるのではないかという仮説を提示した。

ただし V-PTCP.FUT=POSS の再名詞化のプロセスについては本稿では二つの可能性を提示したが、未解決のままである。また、3 類型の仮説についても周辺諸言語の主節述語用法を今後より詳細に分析する必要がある。これらを今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿の内容は第152回日本語学会大会（2016年6月25、26日、於慶應義塾大学）における口頭発表「ブリヤート語の未来分詞の文末用法；分詞の「再名詞化」によるモダリティ表現」をもとにしている。発表時、多くの方々から貴重なコメントをいただき、本稿執筆の際の大きな助けとなった。ここにあらためて謝意を表したい。当然ながら、本稿中の誤謬その他の責任は筆者にある。なお本稿は、2014–2016年度科研費補助金（若手B）「中国北方のモンゴル系危機言語の文法記述とドキュメンテーション」（#26770146）の成果である。

<sup>19</sup> 形式名詞をはじめとする名詞が歴史的変化によって助動詞として機能語化したことはすでに青木（2010: 40）によって指摘されている。ただし青木（2010）は同時に「もの」「こと」が名詞句主要部となる用法が上代・中古から見られることを指摘し、「現代語のモダリティ助動詞とされる「ものだ」や「ことだ」などを歴史的変化による所産と見るか、それとも文末で用いられることによる名詞性の喪失と見るかは非常に難しい」（青木 2010: 46）とも指摘している。



## 略号一覧

-- 接辞境界	GEN - 属格	PL - 複数
=- 接語境界	HON - 敬称	POSS - 所有者人称
1-1 人称	IND - 直説法	PRED - 述語人称
2-2 人称	INDIR - 間接証拠	PROG - 進行
3-3 人称	INS - 具格	PRS - 現在
ABL - 奪格	IPFV - 非完了	PSN - 人名
ACC - 対格	MOD - モダリティ	PTCP - 分詞
ADJ - 形容詞語幹	N - 名詞語幹	Q - 疑問
COP - コピュラ	NEG - 否定	REFL - 再帰
CVB - 副動詞	NEUT - 中立	SG - 単数
DAT - 与位格	NFUT - 非未来	V - 動詞語幹
DIR - 直接証拠	NOM - 主格	
E - 挿入音	NPST - 非過去	
FUT - 未来	PFV - 完了	
<i>Bur.</i> - ブリヤート語	<i>Mid.M.</i> - 中期モンゴル語	<i>Udh.</i> - ウデヘ語
<i>E.Evn.</i> - エウエン語東方言	<i>Nan.</i> - ナーナイ語	<i>elicit.</i> - エリシテーション による話者の作例
<i>Est.</i> - エストニア語	<i>Oir.</i> - オイラト語	<i>ns</i> - 自然発話
<i>Jap.</i> - 日本語	<i>Skh.</i> - サハ語	

## 参考文献

- 青木博史 (2010) 「名詞の機能語化：形式名詞を中心に」『日本語学』29 (11) : 40-47.
- Badagarov, Jargal Bayandalaevich (2015) Two future tenses in Buryat. (Presentation at ILCAA Forum) ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2015-12-27.
- Campbell, Lyle (1991) Some grammaticalization changes in Estonian and their implications. In: Elizabeth Traugott and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization* 1 (TSL19), 285-299. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Choijungjab, et al. (eds.) (1987) 『卫拉特方言话语材料』呼和浩特: 内蒙古人民出版社.
- Comrie, Bernard (1980) Morphology and word order reconstruction: problems and prospects. In: Jacek Fisiak (ed.) *Historical Morphology* (Trends in Linguistics: Studies and Monographs 17), 83-96. Hague, Paris, and New York: Mouton publishers.
- 江畑冬生 (2013) 「サハ語の動詞屈折とその統語機能」『北方言語研究』3: 11-24.
- Evans, Nicholas (2007) Insubordination and its uses. In: Irina Nikolaeva. (ed.) *Finiteness*, 366-431. Oxford: Oxford University Press.
- 井島正博 (2010) 「名詞述語文をつくる名詞節：形式名詞述語文の成立根拠を考える」『日本語学』29 (11) : 48-57.
- 風間伸次郎 (2011) 「ツングース語の接辞 -ča について」『アジア・アフリカの言語と言語学』5: 17-34.
- 風間伸次郎 (2012) 「アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて」『北方言語研究』

2: 139–162.

- 栗林均・确精扎布（編）（2001）『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』仙台：東北大学東北アジア研究センター。
- 栗林均・斯欽巴図（編）（2015）『初学指南』の研究：18世紀の口語モンゴル語』仙台：東北大学東北アジア研究センター。
- Malchukov, Andrej. L (2013) Verbalization and Insubordination in Siberian Languages. In: Martine Robbeets & Hubert Cuyckens (eds.) *Shared Grammaticalization*, 177–208. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- マルチュコフ, アンドレイ（2014）「小柳論文へのコメント」定延利之（編著）『日本語学と通言語的研究との対話：テンス・アスペクト・ムード研究を通して』83–86. 東京：くろしお出版。
- 長崎郁（2013）「東アジア接尾辞型言語における動詞屈折形式：分詞に関する問題を中心に—導入と総括—」『北方言語研究』3: 1–10.
- 小澤重男（訳）（1997）『元朝秘史（上）』東京：岩波書店。
- サンボードルジ, オチルバト（2014）「モンゴル語オイラト方言の形動詞について：ハルハ方言との比較対象を通じて」AA 研共同利用・共同研究課題「準動詞に関する通言語学的研究」2014年度第2回（通算第5回）研究会発表資料. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. 2014-12-20.
- Skribnik, Elena (2003) Buryat. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*, 102–128. London and New York: Routledge.
- 山越康裕（2006）「シネヘン・ブリヤート語テキスト：日常会話を題材にした基本文例集」津曲敏郎（編）『環北太平洋の言語』13: 139–180.
- 山越康裕（2011）「シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞」『北方言語研究』1: 63–78.
- 山越康裕（2013）「ブリヤート語の『分詞』の機能について：屈折的形容詞化と位置づけられるか」『北方言語研究』3: 25–40.
- 山越康裕（2014）「シネヘン・ブリヤート語テキスト（4）：テネグ・タリブほか2編」『北方言語研究』4: 185–198.
- 山越康裕（2016）「シネヘン・ブリヤート語テキスト（5）：王様と役人になる二人の男の子」『北方言語研究』6: 111–129.
- Yamakoshi, Yasuhiro (2011) Shinekhen Buryat. In: Yasuhiro Yamakoshi. (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*, 137–177. Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- Yamakoshi, Yasuhiro (2016) Predicative participles in ‘The Secret History of the Mongols’. *Altai Hakpo*. 26: 85–101.

**Two future expressions in Shinekhen Buryat:  
Three typological models of the verbalization of participles**

Yasuhiro YAMAKOSHI

(Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa,  
Tokyo University of Foreign Studies)

Shinekhen Buryat, one of the northern Mongolic languages, has two forms that indicate future situations. The first is the future participle with personal predicative particle (V-PTCP.FUT=PRED), while the other is the future participle with personal possessive particle (V-PTCP.FUT=POSS). In this paper, I focus on functional differences found between these two forms, and on the basis of those differences make the following suggestions regarding their usage:

- 1) V-PTCP.FUT=PRED is the ‘unmarked’ future expression, while V-PTCP.FUT=POSS carries modal meanings such as the deontic or epistemic.
- 2) The opposition in modality between the two forms (V-PTCP.FUT=PRED vs. V-PTCP.FUT=POSS) is parallel to the opposition between finite and participial predicate forms in many neighbouring languages.
- 3) The opposition between two forms occurred through two process of grammaticalization such as i) verbalization of participles and ii) re-nominalization of verbalized participles.

In addition, I suggest three typological models of the grammaticalization of participial predicates based on Malchukov (2013), and classify Shinekhen Buryat into the second, ‘re-nominalization’ type. These three types are:

- a) Verbalization [Participle-finite (default) vs. original finite (+MOD)]: Participles are highly verbalized, and original finite forms are specialized to carry any affirmative modal meanings.
- b) Re-nominalization [Participle-finite (default) vs. re-nominalized participle (+MOD)]: Participles are also highly verbalized, and other, nominalized forms derived from participles carry any particular modal meanings.
- c) Insubordination [Original finite (default) vs. participle-finite (+MOD)]: Participles are not fully verbalized, so that they carry any particular modal meanings as nominal predicates.